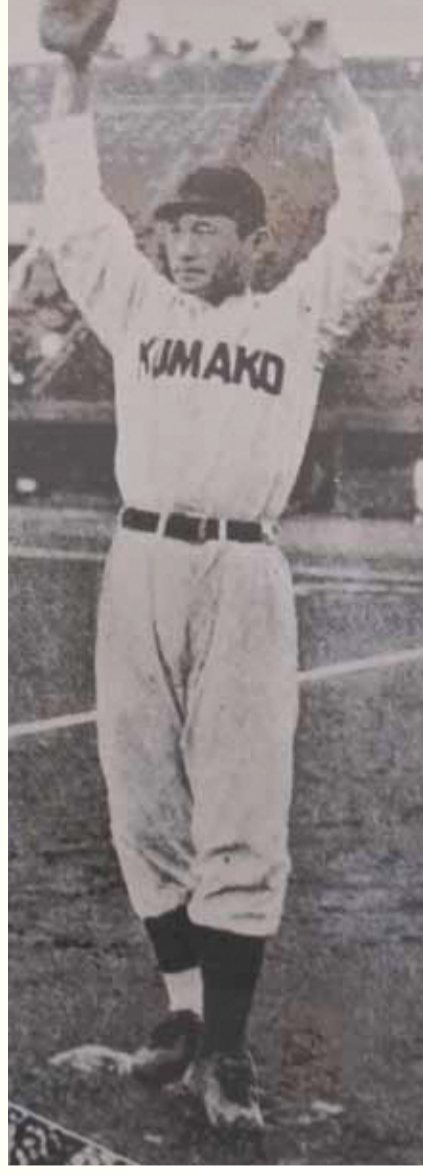




投手として甲子園準優勝



熊本工業学校時代の川上哲治氏 川上哲治生誕100年記念事業実行委員会 所蔵

川上さんは1920(大正9)年3月23日、現在の人吉市に8人きょうだいの長男として生まれました。

野球好きだった父の手ほどきを受け、小さいころからうちわをまてにボールを投げているそうです。大村尋常高等小学校(現人吉西小)で本格的に野球を始め、雨の白でも校舎の廊下で投げ込むほどの猛練習で、左投手として知られるようになりました。熊本県立工業学校(現熊本工業高校)に進学し、3度の甲子園(夏2回、春1回)に出場、1937(昭和12)年の夏の甲子園大会で投手として準優勝する活躍を見せました。バッテリーを組んだのはともに巨人に入団した吉原正喜さんでした。



幼い日の川上哲治氏(中央) 川上哲治生誕100年記念事業実行委員会 所蔵



厳しい練習で「ボールが止まって見える」境地に



川嶋のぼる

1938(昭和13)年、川上さんはプロ野球・読売巨人軍に入団しました。川上さんは契約金300万円、月給110万円のうち半分を仕送りして恩返しをしました。大学を卒業した人の月給が50円だったころです。川上さんの家族を大切に思う気持ちがにじみ出ています。仕送りは1985(昭和60)年にお母さんが亡くなるまで続いたそうです。

ルを獲得しました。兵役が終わり1946(昭和21)年6月に巨人軍に復帰、4番打者としてチームを引っ張り、打率3割5厘、本塁打10本、打点67の好成績を残します。以後、1958(昭和33)年まで主に4番打者として活躍します。

復帰後の1シーズン、用具メーカーのアイデアで赤く塗ったバットを使いました。ホームラン打者として活躍していた大下弘さん(東急)が青いバットを使い「川上の赤バット、大下の青バット」と言われ、野球人気が子供たちに広がるきっかけとなりました。

1949(昭和24)年4月12日の南海戦でプロ野球史上初めての逆転サヨナラ満塁本塁打を放ちますが、好調が続かないことに悩んでいました。翌50年の夏、じっとしていても汗が噴き出る暑い日、カーブ打ちの特訓で無心にバットを振り続けていた時、突然ボールが打つポイントで止まって見えるように見えました。そこを思い切り振るとカーンと確かな手応え、次の球もその次の球も…。球数300球、2時間も打ち込み、探し求めていたバッティングにたどり

着いた瞬間でした。ストライクとボールを見分ける選球眼も抜群で翌年、川上さんは打率3割7分7厘、三振はわずか6個と驚くべき成績で首位打者となりました。「ストライクは必ずホームプレートの上を通る。球を見て、ポイントまで間をためて、たたく」と打撃の極意を引退後に語っています。その感覚は年を取っても衰えず、テレビ観戦していても打者のタイミングが合っているかを見極めて「打つよ」と言い当てたそうです。

「ボールが止まって見える」境地から生み出される川上さんの打球は、鋭く低く飛んでいくのが特徴で「弾丸ライナー」と呼ばれていました。これを支えていたのは猛練習です。そして、1958年、巨人の4番打者をルーキーの長嶋茂雄選手(現読売巨人軍終身名誉監督)に託して引退します。MVP3回、首位打者5回、本塁打王2回、打点王3回。史上初の2000本安打(通算2351本)など数々の記録を残した「打撃の神様」は惜しまれながら引退しました。

そして、1958年、巨人の4番打者をルーキーの長嶋茂雄選手(現読売巨人軍終身名誉監督)に託して引退します。MVP3回、首位打者5回、本塁打王2回、打点王3回。史上初の2000本安打(通算2351本)など数々の記録を残した「打撃の神様」は惜しまれながら引退しました。

そして、1958年、巨人の4番打者をルーキーの長嶋茂雄選手(現読売巨人軍終身名誉監督)に託して引退します。MVP3回、首位打者5回、本塁打王2回、打点王3回。史上初の2000本安打(通算2351本)など数々の記録を残した「打撃の神様」は惜しまれながら引退しました。



写真 / 読売新聞社



熊本工業学校で川上氏とバッテリーを組んだ吉原正喜氏 熊本市水前寺野球場 所蔵



赤バット 野球殿堂博物館 所蔵



東京巨人「花の13年組」 野球殿堂博物館 所蔵



二千本安打記念絵皿 野球殿堂博物館 所蔵



読売ジャイアンツユニフォーム 野球殿堂博物館 所蔵